

るということは、大切なことである。授業において、すべての子供に教師が要求する水準が同じであるならば、能力の劣っている子供は、いつも成功感を味わう機会をうばわれていることになり、問題を起こすことになりやすい。そこで、親や教師は、その子供の発達や能力に応じた課題を与えるようにし、それができたら、認めてほめてやるようにしなければならない。

(4) 所属の欲求

同じ年ごろの友だちの仲間に入って、一緒に行動をとりたいという欲求は、幼児以降の子供にとっては非常に強いものである。だから、親が子供を保護しすぎて、外に出さないと、子供は心の中では友だちを求めながら、仲間に入れないために、社会性が十分に伸びず、不適応状態を起こしやすい。

(5) 独立の欲求

子供は大きくなるに従って、人から指示されたり、命令されたりするのではなく、自分の意志や判断で、何事でもやりとげたいという欲求を持つようになる。こういう場合に、親が専制的で自分の思いどおりに子供を動かそうとしたり、あるいは、溺愛^{できあひ}しすぎて赤ちゃん扱いをすると、子供から独りで行動する機会をうばってしまうことになり、問題を起こすことになりやすい。特に、思春期にこの欲求が阻止される場合、ひどい反抗、非行などを引き起こすおそれがある。

以上が、普通、基本的欲求として取りあげている代表的なものであるが、これに、次のような欲求をつけ加える考え方もある。

(6) 新しい経験の欲求（探究への欲求）

(7) 安定感の欲求

(8) 支配と優越を求める欲求

(9) 経済的な欲求

(10) 生理的な欲求

2. 適応の機制

一般に、基本的欲求が満たされた場合は、子供の心の中は平静で、均衡が保たれている。しかし、いったん欲求が阻止されて欲求不満が起これば、均衡状態が乱されて、心の中の安定が失われてくる。このように、心の中の安定が失